

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部 創立10周年に寄せて

②

へ大空高く聳え立つ

五葉の山を仰ぎては
學びの高嶺に高くとも
攀ぢ登らんと勵むなり
慈父の作詞した大船渡
市立日頃市小学校校歌に
詞われている五葉山は、
子どもの時から朝な夕
な、無言の啓示を与えて
くれた畏敬の山である。

振る返ってみると、わが
人生は五葉山を抜きにし
ては語れない。それほど
縁が深い。

五葉山のふもとの山
里・日頃市に生まれ、育
ち、大学を出て、初めて
赴任した学校は、五葉山
に連なる大窪山に開校し
たばかりの開拓地の分校
だった。驚いたことに校
舎がない。開拓民のKさ
んの家の部屋を教室にし

た。

教員は私一人。はじめ
児童は五人だったが、後
に中学生も転入し、小学
一年生から中学三年生ま
で計十三人になった。教
室も授業もパンク状態、
苦悶の毎日だった。

しかし、子どもたちの
嬉々とした笑顔に救われ
た。学校が楽しくて、朝
早く教室の隣の部屋に寝
ている私を叩き起こし、
夕方、暗くなるまで学校
から離れなかった。

授業の初めに宮澤賢治
の「雨ニモ負ケズ」を語
る(そら)んじ、九九を唱
え、シカの鳴き声を聞き
ながら、二十六の瞳をキ
ラキラ輝かせ、健気に新
米教師の声に耳を傾けて
くれた。

在任中、私は雲の切れ

間から五葉山を側に眺
め、幾度へ大空高く聳
え立つ五葉の山を仰ぎて
は…と口ずさんだこと
か。その度、恩愛の五葉
山はたじろぐ私を懐深く
掻(か)き抱き、勇気づ
けてくれた。

「大空高く聳え立つ」

盛岡市永井 金野 清人

二十六の瞳に後ろ髪を

てすぐ生徒の一人、中学
三年の坂井清君たちと授
業前、野球をして遊んだ
ことを覚えてる。

翌年も連続して川村勝
人君たちを担任した。セ
ピア色のアルバムには、
五葉山で子どもたちと撮
った写真が多い。登山好
きの私は、子どもたちを
誘って十回以上も五葉山

どもたちに囲まれ、地域
の人々に助けられ、五葉
の山懐に抱かれつつ、
「機関車先生」と呼ばれ
た。時に暴走したり、時
に脱線、停車しながら
も、心温まる絆に支えら
れて、無事に過ごすこと
ができた。

十三歳。公立学校校長を定
年退職後、執筆活動を始
める。「北上詩の会」「県
詩人クラブ」会員、詩誌
「堅葉會子」「新現代詩」同
人。東海新報、岩手日報、
盛岡タイムスなどに随筆
などを掲載。五葉山にま
つわる詩や随筆、多数。

引かれる思いで大窪分校
を去った後、転動した学
校は五葉山麓の山里に建
つ住田町の五葉中学校
(現有住中学校)だった。

この時、なんと私は五葉
山に縁があるのだらうと
思った。

弱冠二十二歳の私は、
子どもたちにとって、教
師というより兄貴のよう
な存在だったと思う。教
えるより教えられること
の方が多かった。赴任し

いるとも。一緒に五葉で
野球やった清君だ
べ!」。三十年振りの再
会に、二人とも抱き合っ
て喜んだ。

最初に受け持ったのは
高秋久之君たち。卒業ま
での二年間、泣き笑いを
共にした。その間、若氣
の至りで失敗ばかり。セ
ピア色のアルバムを見
て、今になって臍(はら)で
をかんんでいる。

五葉山に遠足に行ったときの思い出の写真(中央が筆者)



ニシシー エッセイ

修学旅行費の足しに

在任八年間、素直な子